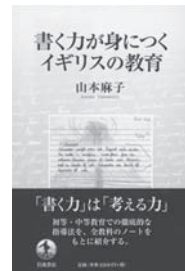


新刊自己紹介

『書く力が身につく イギリスの教育』

山本麻子

岩波書店 2010年4月刊 2,200円+税



イギリスで生活していると文書の多さに圧倒される。どれも長くて細かいし、きちんとした言葉遣いで書いてある。国や地域の中で人間らしく生きる、すなわち個人あるいは団体として権利を守るためには、乱暴な言葉でわめいたり逆に黙ってあきらめるのはいけない。時間がかかっても辛抱強く状況を説明したり、他人に説得するために話したり書いたりすることが大切だと思ひ知る。

学校では社会で要求される言語能力を培うという目標のために子ども達に「書く」ことを教える。この目的達成のための技術は大変高度なので、幼少時から時間をかけ、系統立った計画に沿って訓練する。促成栽培の方法では目的が達成できないことをイギリスの教育関係者や教師は承知している。

本書では、いずれ社会に出る子ども達に対して、小中学校という最も重要、しかも長期に渡る時期に、教師が書くことをどのように教えているかを事例として紹介した。何の目的でどんな作業をさせるか、どんな基準で評価し向上させようとするか等を盛り込んだ。これは、イギリスに日本人家族として長く住み、私自身の勉強や職業体験を通して発見したことに基づくもので、日本では初めての試みだ。

国語の例として、小学校入学前後の指導の仕方、8～10歳時の考える土台を作る書き方、

10、11歳時の作文、効果的な描写、書評、脚本書き、書き換え等を紹介した。11、12歳の子ども達は、高度な構成力、描写力、想像力が要求され、物語の始め方の工夫なども学ぶ。12、13歳では構成力、描写力をさらに磨き、物語や議論のための文章を書く。13～15歳時には考える筋道立ての訓練のための実践を繰り返す。これらの実例を見てほしい。

イギリスでは民主主義が早く発達し、その向上のための議論が絶えない。本年春のイギリス総選挙の折にそれを目の当たりにした。産業革命も世界に先駆け始まったが、それには創立350年になる英国学士院の存在も大きい。科学は、実験を重んじる実践的な方針をとるが、議論や討論を尊び、書くことを重視する。

本書で紹介した化学、物理、歴史、地理の実例はそうした伝統や方針を反映する。理科では頻繁に図を描き常に文章化する。歴史では背景や原因を探り自国を考える。実践的な地理の学習でもまとまったものを書く。13歳以降はほぼ全教科で報告書を書く。「書いて独立して考える」機会を通し、世の中に出ていく準備をさせる。これらの様子が日本の教育現場に参考になれば幸いだ。

英国在住。言語学博士。専門は日本人児童の言語発達。著書『ことばを使いこなすイギリスの社会』等。